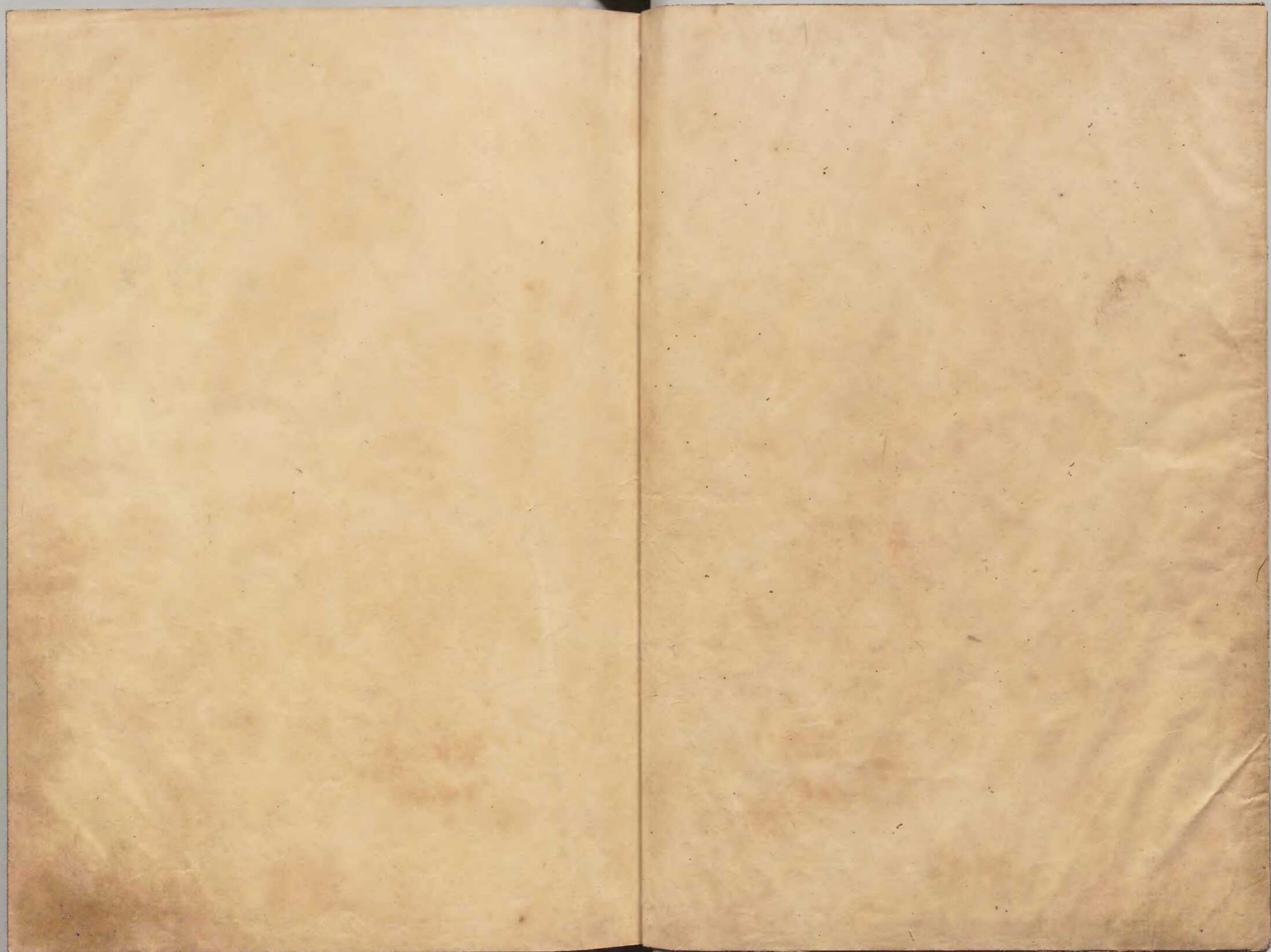


寛永諸家譜

清和源氏西四冊之内
義家流之内為義流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (20)
函號	特 76 1





立花
本堂
馬場
野山

寛永諸家系圖傳

清和源氏

丙二

義家流

為義流

立花

家傳いしいしいしく大友たゆうと立花たちばなの曰いひ氏うぢなり
いしいしく大友たゆうのお吏し理り家かかしとめ
杉すぎの郷のへり布ふつくく一人ひとりの男おとこと
ううめめりり童わらわ名なと一ひと清きよ作さく丸まる也なり

淺草文庫

此の家より 毎院次官親能が子なり
 頼朝卿源乃姓とたまふり
 大友を弟お目丸を御監源能也
 こめさきし 一とげしとて 友原とあ
 らるる 源氏也ふら頼朝卿奥
 河内陣の時 鎮とたまふり
 信成と
 今案じらふ 能成は友を御監
 友原能成が 実子ありとて

友原とて 能成は友を御監

建久七年 けりて 友原とて 能成は友を御監

友原とて 能成は友を御監

友原とて 能成は友を御監

友原とて 能成は友を御監

友原とて 能成は友を御監

友原とて 能成は友を御監

二十三代の孫大友宗久守能秀は
鎮とお侍一嫡子忠孝の義親は
ゆづる立花も又結成より十六代の
孫立花左衛門監宗茂この鎮とお
侍一嫡子左衛門將監忠孝より
ゆづる宗茂十二歳より毎度我
場おのうじ討は鎮とおあげくお陣
と秀吉の時よ鎮とおくくのかりり
のつゝも鎮とおおきあゝ

立花の山城は太友貞載が源兵衛家
なり結成より貞宗よりくは太友氏よ
して貞載の時より立花左衛門監宗
茂より又立花おめ代つゝよりきさら
これ重寶あり一お八郎お御よりお
よりらる鎮一よ八世氏よりおなまら
たお吉光は脇指一お八郎お首とす
て実捨よそれ一軍解がゆはこ
と軍功氏名の重寶として今にあり

能直

秘院法官親能の養子也傳は親能の

子なり也といひり

童名ハ一法昨九 親能郷能直と大友

と号し一法前あ司九を御監望稱し

た清の権少尉檢北能直使は行は法直と

小叙せし給これよりりて源氏なる

母大友守り重經守がしとめらる

法能能直

親秀

利根次第 大炊助 小雲路と号し

法能能秀

親泰

童名ハ兼作九 丹后守 出羽守

兵庫頭 大炊助 式部大納 法能能

と叙す 娘の名兼泰直は親泰と

あうたむ

親時

左を将監

孫人因幡守

法名道徳

貞親

新孫人

左を左大臣御監

法名依り

叙一か持身に任じ

昇殿とゆふ

法名正温

百寿寺中号す

貞宗

孫太郎

左衛門尉

左近右監

左を

法名具南

顯孝寺と号す

貞載

童名い何多丸

三郎

左を御監

家傳

延元二年

建武四年

五月

十一月為氏郷入洛此時東大友の豊後

回ありて九別れ送院とおく西大友
負載ハ飛策九ヶ必此掬と卒し
家傳の蘇をあげ高氏郷の味方と
してとほし揚梅東洞院にお陣し
敵兵強城此判友親光とくんでそ首
とせり軍府しすく定換みり
あふ時高氏郷廢兵して高光此
脇指したまふ志くれどもあつたをい
て同月十日自死す是より大友高氏泰

（高氏）立花の家臣是とお續す大友ハ
を扱のあありし嫡子一人は名高
しむ

今業ご終る太平記といし親光
いしありて高氏（隆高）をわ
ふかき高氏これと終し大友
たをお盛しつりてこれと
親光もかき大友をうらまは
け時大友が世年とせきりあ合戦

氏恭

此の親光討死すこと
は歴々たるお毒せり今志
を流すものと

童名ハ千松丸

孫太郎

式部丞

大友と五郎と

是よりより氏恭と

後の大友と号は

法名清魏

宗匡

童名ハ彦子丸

五郎丸を御監

三河守

法名延心

親直

童名ハ彦盛丸

左を御監

山城守

法名宗徳

親政

童名ハ千代盛丸

右を御監

丹後守

法名道運

宗勝

童名右美津丸

右左衛門

因幡守

法名宗玉

鑑光

童名右直電丸

右左衛門

長庫頭

法名宗三

鑑俊

童名千龜丸

右左衛門

但馬守

法名了禪

親若

童名右鶴子代丸

右左衛門

山採守

法名一如

鑑連

重名八幡丸

左を右監

伯耆守

丹後守

天文元年鑑連十七歳（い）我場（い）み

おもしろきも後毛利元就と九段の法（い）お

せおもしろて立花の山城とせじ鑑連

あざしくあせごたのひも外清津毛利

南地竜造守馬が居城をせめく合戦

と終事とあそく二十七歳（い）けるよ一（い）を（い）

敗軍（い）せじ

天正十三年（い）飛居れ必言良山の軍中に

おわく病死時（い）七十歳 法名道智

家茂

童名八千代丸 左を右監 右を彈守

源位下に叙し侍候し後と判替して

立身と号し 実高橋鑑連の子（い）あ

宗茂十九歳いざなの時とき宝海山たからうみの峰みねに居ゐり
主林ぬしはやしより立花たちばなれ山城やましろよりよりなる

天正六年十二月より翌年の夏なつまで
蒲池鎮かきいの筑紫ちくし津門つもん竜造りゆうぞうも隆信たかのぶは
格實かくじつのいしをももに力ちからして宗茂むね茂の居城ゐりやしろを

とせしむるも宗茂むね茂をせむたのむく一
夜も敗北ばいぱくせず敵兵てきへいをくくして翌年つぎとし

七月中旬しちげつちゆうかんは敵軍てきぐんとて時宗ときむね茂茂十二歳にじふにさい軍
陣ぢん乃なはけりなり

同八年どうはちねん秋あき月つき格實かくじつ三月しがつより九月くがつまで

るも敵軍てきぐん十夜じゆつ宝海山たからうみの峰みねとせむるも
宗茂むね茂は居ゐるに城しろと居ゐるがゆ事ゆことなり

敵村てきむらよりなるがゆ事ゆことなり

同九年どうくねん秋あき月つき格實かくじつ原田はらだ修格しゆかくのついで

ありては宗茂むね茂が居城ゐりやしろをせむるも
乃石坂のいしかよりなるがゆ事ゆことなり

阿蘇あその山やまよりなるがゆ事ゆことなり

同十年どうじゆねん秋あき月つき格實かくじつ乃石坂のいしかの城しろよりなるがゆ事ゆことなり

是本の條より秋月將實の七年
宗像北城より氏重の兵とせし合
原よりわく牛の別を申の刻を合
我と敵共生いたし生かぬなり
て川邊へ河舟宗茂を川妹におわく
わらやまきとわく

同十年結ぶ八ヶ谷に法約おのくたの
辰味とせしむる秀吉も属せしるに
岩屋立花のあ城の秀吉も海服すは河

山籠り宗茂の立花北城條よりせめ来りて
数年合戦はおよそにして秋月將
實は義久の属して河津尚書類
伊集院右衛門左衛門と俱に臨む八ヶ谷の兵
とわく七月十三日岩屋より行きて
急よこれよりせし同月廿七日岩屋北城を
せめおとせわく城より橋保運り救す回
廿八日より八月廿二日まわく立花の山城と
せし宗茂とわけて河津氏れあ將をよ

ちりす翌日為松の陣と屋少り高島
の陣とせり星野氏先が首と中
岩屋落城の後林月村突られと
系我兵と川のくくれとつとみたら
その陣をせあやうして立花の山城は陣
と秀をけおとしとて
感状とたまりり同後のとつとつ
太刀なりびよむとと二百万
と為す

同十一年三月廿日秀を前此小倉
よりと陣と流布の林月村す
たまり河家系揚と秀を前此と
くめて岩屋の城を伝運はとあり
せり事とありとたまたま又河家が立花の
一珠ととて陰を八ヶ岡のきとをひち
星野先が首ととり岩屋の城と
ふととては類なきし一印感あり
いまより河家合戦のとき先が

たる處いしきくい備前いをいのい沖腰いわあい
いいはい鑑い胃い馬い沖い紋いのい鞠い羽い織い者いとないまいらい
といらいにい延いおいせんいといせいしい時い又い命いにあいてい
沖腰いにい沖いおい付いといらいしい軍い事いといらいしい
くい立い死いよいゆいらい
同い年い四い月い十い一い日い宗い茂い先いづいけいういてい言い良い
山いよいかい路いとい時いくい瑞い崎いのい賀い身い宗い茂いよいあいてい
降い糸いせいんい事いといらいふい宗い茂いはいしいのい秀いをいんい
遠いしいてい是いといゆいとい又い秀い者いのい命いといらいしい

ういりいてい宗い茂いがい一いといらいふい蒲い池い色い妻いのいあい城い
といせいあいといりいてい城い代いといないくいまい段い肥い後いはいあい
一い先いづいけいやいしいてい南い岡い山い麻い隈い本い相い良いのい
頼い小い代い合い志い赤い星い有い動い和い仁い等いのい城いといせいあい
ていこいらいくいくいくいくいしい又い隆い磨い一い先いづいけい
といらいくいくいくいくいきいおい水いのい城いといせいあいおいらいしい
てい城い代いといないくいいい河い崎いはい義い久いないらいびいめい
伊い集い院い祁い谷い院い入い来い院いかいのいくいくい志いらい
といらいしいてい降い糸いとい後い河い太いはい城い直い新い

納武茂も一我とつけくさん
宗茂先づけやして大石の城と
たつらんこすか時と敵共とせくみ
おぼすしと降糸すられし
とくを秀吉に属しとて
流石れ頼朝よりつたはる宗茂
の軍切ありみより流石は
百二十二百石と柳川城
同年佐々木貞房同と
時

一揆蜂起す佐奥もまに
おぼげんとに宗茂秀吉の命と
うけく飛石は日と時日と
す一揆は先づけと勅大陽と
解黨とくを退治すこの時
く忠臣おけく飛石と
し中威状とたましり
臣位と叙と
柳川侍と号す

同十八年小田原陣此時家茂瓶坂回
より糸陣して秀吉を湯

東照大権現とあすられし信守して

江戸より又岩付より秀吉家と

りしてのこまひけりし年物群と

せむべし世の國はあつて共と世の

是とまつぬしとあまされたまの

ありて退かせんとすら時

大権現よりあつてあつせんからん

の出陣は九列の法より一人として

は地よきなるものなりとあつた

やう糸陣れらるるに神妙なりと

う朝鮮征討れしとあつた

なすり海軍と是もあつた

いすす不るりしとあつた

信馬とあつた

文禄元年秀吉朝鮮を陣の時

法ゆとあつた

合戦ふに敗北す侍事か

同二年大明の兵救可騎御解とす

もんがため平安城よ出陣す日本乃

軍士射陣して合戦ととらへ

大明れ救兵よ進やうとてく川を

とき大明の兵勝よ多く御解の固

却よあつり陣とて日本乃の法を

後と先子やして御解れ必事

おしとせも大門の外よたけふ家

くはりやとけく大敵をうら

やあてとてくく敵わやういす

兵死とれとれもかたは日本に

威大ようふ秀吉ときこめて

感状な〜びみ沖馬と家名なす

同三年宗茂秀吉の命に

本よ呉家殺末よあわく十三

御殿とたまり御見の珠下に

たけ

同日年あつちしをあつち長元年あつちよりあて家
後物辨あつちよあつちあしあつちしてあつち伏見城あつち

より長と

慶長二年あつち宗茂あつち二あつちび物辨あつちよりあしあつち

時あつち秀吉あつち宗茂あつちよりあしあつちせけるあつち世平あつち

の勢あつちよりあしあつちふることあしあつちれ日あつちなあつちあつち

時あつちあつち大團あつちとたあつちあつちあつちとあつちあつち

し宗茂あつち共あつち根あつちとあしあつちくあつち士平あつちよりあしあつち

一あつち釜山浦あつちよりあしあつちとあつちあつち物辨あつちよりあしあつち

日あつちなりあつち進あつちす

同三年あつち秀吉あつち薨あつち去あつちり物辨あつち在陣あつちれ

共あつち宗茂あつちよりあしあつちせけるあつち世平あつち

た

同八年あつち九月あつち関原陣あつちの時あつち宗茂あつち秀吉あつちの

命あつちよりあしあつちけあつちくあつち江列あつち大津あつちれ城あつちとせしあつち城あつち

至あつち十二月あつち降あつち糸あつちすあつち宗茂あつちよりあしあつちせけるあつち

くあつち翌日あつち高あつち野山あつちよりあしあつちせけるあつち世平あつち

よりあしあつちせけるあつち

同年の冬十月が友肥後守清正忠田
必多お中もみ柳川よりせしむ
宗茂也

大権現よりしきたりくまのつらや家とせふ
志ろ市は端端加賀守忠茂をみゆへ
はこせとさうつけたりもら共とあて
とそみ金銭よかへんもす可み宗茂
のち小野和泉共とつらやもとせ
く志道もも宗茂の實弟の村石田

よくとせざれより述(き)がため金銭
をやめ飛城と肥後守もらす
のみ回しより江戸(お)もせしきも命と
ゆめんありて

大権現

台座院殿沖系(あ)おそれその翌年
奥列南乃郷よおわく二万五千也
百石を領し沖旗本おなる
江戸は互任はらう事年(あ)

同十九年大坂陣此時
大権現

台徳院殿此修築一公陣す

元和元年大坂五社のこき修築

同六年

台徳院殿より御後のおよあわく十萬

九千六百四十七石とす

同八年

台徳院殿此命あり飛騨書に記す

台徳院殿此御めぐり御こと以法大名の能

一所成のたいごやみ御相傳は作す

きれひの御命にり毎夜修築す

何れ時宗茂とりて老のたぐえ

あまのあまぶ(き)のまきあくあ物此御

茶入と御徳と

寛永十一年正月肥前此回馬の二揆

是治れたぬ

將軍家の命とありしりく宗茂法物也

甲いくい肥い前まへ日ひおおももししききここれれををせせじじ同
二月ふたつき廿にじゅう八はち日にち一いち揆けん選せん者しや乃なり後ご宗しゆん茂まう共きととお
ここああくく統とう後ごよよかかへへ給じゆ

同どう年ねん九く月げつ五ご日にち

おお軍ぐん忠ちゆう宗しゆう茂まうがが館くわんのの濱はまのの時とき栗りし田でんは
則すなは國くに北きた江え陽やう指さしととおお給じゆ

同どう年ねん十じゅう月げつ廿にじゅう日にち 詢ゆん命めいににとと判はん發はつ

てて立た成ちやうとと号ごうにに

同どう十じゅう六りく年ねん二に月げつ一いち日にち

将しやう軍ぐん宗しゆう茂まう井い瀧たき波な守しゆう忠ちゆう勝しやう館くわんのの濱はまのの時とき栗りし田でんは

にに宗しゆう茂まう江えおお侍しやうのの同どう儀ぎ也やのの時とき

おお軍ぐん忠ちゆう宗しゆう茂まうととななままりりとといいははししとといいははししとといいははしし

是こゝとと為なるるとと

同どう年ねん四し月げつ三さん日にち 詢ゆん命めいににとと判はん發はつとと忠ちゆう

茂まうののいいづづつつとといいははししとといいははししとといいははししとといいははしし

とといいははししとといいははししとといいははししとといいははししとといいははしし

同どう年ねん七しち月げつ十じゅう八はち日にち

おお軍ぐん忠ちゆう宗しゆう茂まうがが館くわんのの濱はまのの時とき栗りし田でんは

同年九月十二日

將軍家品川東海より渡河し河津校と

たまきり〜と光とたしけらる

要次

臺名八千石丸 至臨三

筑前岩屋北山陣の居候と

天正十八年秀吉筑紫の教向乃

時宗先づけり重治とれとてさふ

同年依り陸奥より肥後北國と候とて

一揆蜂起す〜と宗茂を叩く

と柳〜とととととと

同年秀吉より筑後之國と池郡

おあ〜と地となまりり同郡内山村

候す

同十七年秀吉れ命によりは下

叙と

文禄元年の朝鮮の時重次宗茂

空向〜と渡海す

同二年大内氏たいないしの兵つゝ朝鮮しんせんとすくんため
おられ時とき日本の軍士いくし敗北はいたくと宗茂むね茂
先まづかけわけて大内氏たいないしの兵つゝとらやめ
重次むねつぐと道みちと志こころとす

同三年秀吉ひでよしの命まことあしう宗茂むね茂日本にっぽん

おつらう時とき重次むねつぐと御ご返へんす

宗長むねなが二年秀吉ひでよしの命まことあしう

宗茂むね茂と御ご返へんす

同三年日本にっぽんの法しよ務む御ご辨べんと御ご返へん

の時とき宗茂むね茂と御ご辨べんと御ご返へんす
おわり

同十八年三月廿八日

大権現

名徳院殿なとくゑんとあす三月廿五日しんげつにじゅうごにちお

わくわく御ご返へんす

同十九年大坂陣おさかじんの時とき宗茂むね茂と御ご返へんす

御ご返へんす

同年十月九日しゅうごつにゅうにち常陸ひらたけの島流波郡しまなみづらぎ郡ぐん村むら

墨村よあわく虫千石地となまふ
元和元年大坂奉祀の時家茂せ
同く陣とほむ
同二年七月十九日江戸小あわく病犯
年四十六 法名道白

権次
孫七郎
元和三年八月一日

名陸院殿とあむ

同年十二月十三日
礼す

同七年正月十日
あわく虫千石地

同九年八月六日

名陸院殿の命あり

寛永七年三月廿七日

病死時廿七歳
法名全心

種名

童名ハ松子代丸 甲斐守

元和九年十一月

名徳院殿

將軍と為ると

寛永七年十二月廿九日

叙す

同十年六月相列中邦矢名村

あわ〜〜地七百石とたまらる

種名

童名ハ仙千代 氏幼少物

寛永七年十二月廿九日

為れと

同十年の肥前少〜一揆蜂起

して忠義が陣小と〜

〜〜〜

忠茂

寛永十一年九月九日

丸を納監

寛永十一年

元和八年十二月廿七日十一歳少く元服

台徳院殿より沖澤此家と下され丸文字の

沖刀と好銘と

寛永十一年正月服が少く一獲れ時 納金と

うけとるりりくお陣と

同十五年三月の陣す

同十六年

將軍忠茂教命よりお督とく

同年七月十八日

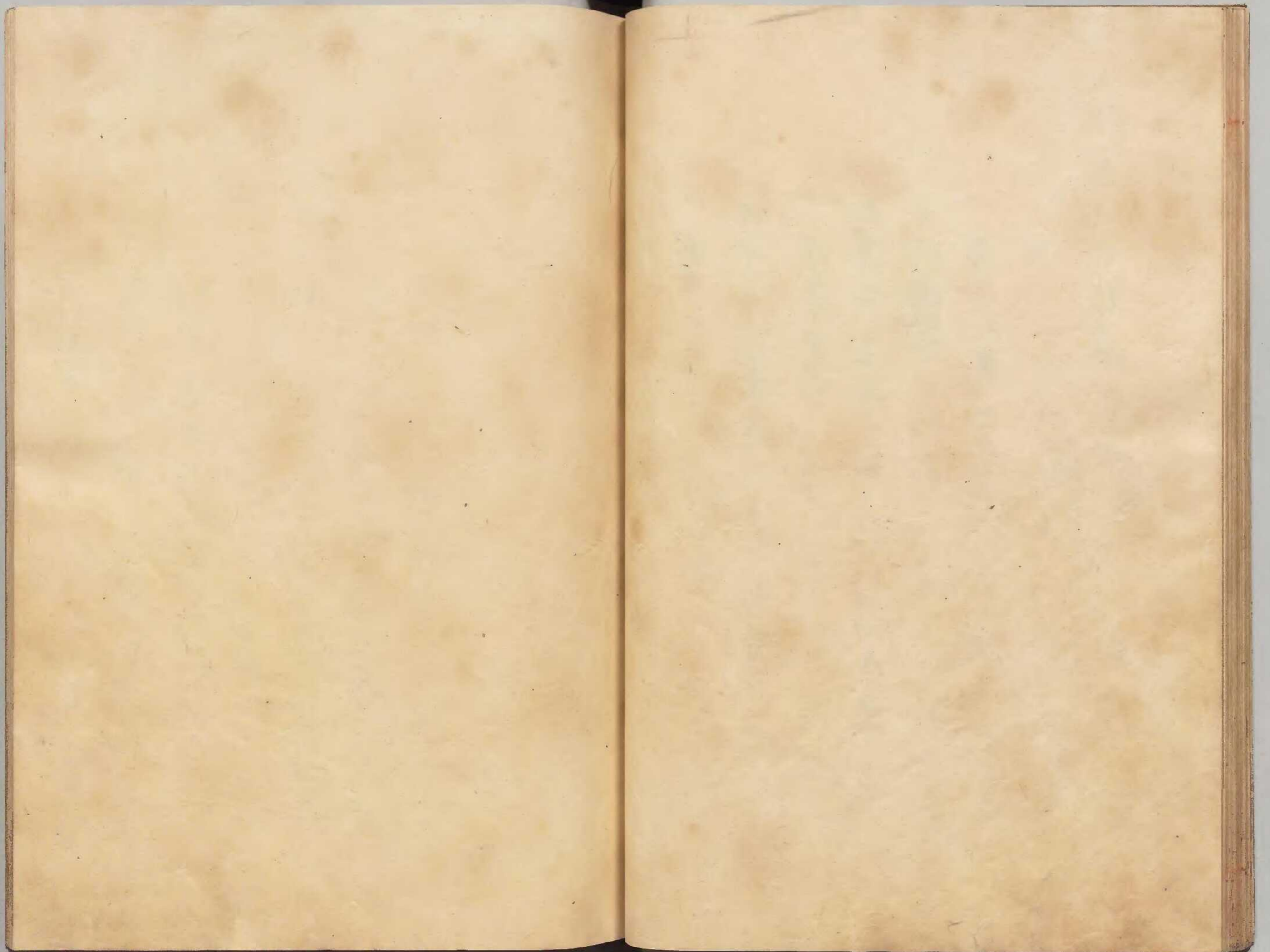
將軍忠茂立無く領より渡沖の時忠茂延来れ

沖腰物と好銘と

同十八年三月朔日位下み銘と

家紋襲名





本堂

子傳こでんおいしく頼約たのやく郷伊豆國こういずくににおりせし

時伊東祐親ときいとうゆうしんかじとちて志のこころいかに

男子おとこよりありまゝ子三歳このころの時祐親このときこれ

をすて大母おほははいりありとれ男子おとことそとく

伊豆の白旗いずのしろはたれ倒たふさしとつむ乳母ちちを

かきしそてひらふひらくくわげがれ

備田平太衛門尉びへだへいゑもんゑいよはねくもと善清ぜんせい

奥州直勢此和賀より伊弉岐
以和賀の沖下を号す其嫡流也
和賀の沖下を稱し其子男出羽國仙
北中郡本堂の城より伊弉岐を稱す
とす天照太神此靈後ありみよて
子孫お継ぐ伊勢を号す
今案に源平盛衰記にいふ
頼朝壯年ありて伊豆島に誓居
の時伊東祐親が如く志す事あり

祐親が女これしすめいさめす頼朝
ひうの母をみよて男子とあり
よかりていとよき子孫あり
名づくに歳乃時祐親系初より伊
豆のついでて子孫ありと記され
みよやとやふと妻実と記され
つく祐親平家ら責と記され
いより家人を号して子孫を
と伊豆相川の石白流に記

義親

伊勢守

よつらり子鶴と負まゝふりてあ
はけらす後日小頼物御祐親と
あくとほふ事いけぬは依くても
是のまゆく古来より世人はま
流なり志もたはる子孫ありこ
事あつらひし事いけぬも今志
はあつらひし事いけぬも今志

頼親

伊勢守

お母同北浦乃珠主产次氏と教度い
我て北浦号野少く討死 享年四歳

出母必合次北珠主と母少く合戦
討死 享年四歳

朝親

伊勢守

忠親

お丹国仙北乃より成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目
成思丸城を成思孫と目

侍邊守

天三十八年を長秀が北條氏と追討の時
忠親相州小田原少くけりしに秀吉に

湯す

同年秀吉が丹波国沼田に城を築いたを
追討の時忠親大谷刑部が湯すを継が
湯すを継が湯すを継が湯すを継が湯すを継が

同十九年豊前九部陣の時忠親も
在陣し居りて在陣す

文禄元年秀吉が朝鮮征伐に忠親

末とちりてのこころに
希田流花守利家れよに属して肥前の
名護屋小おとしり秀吉より技持方と
たすりけ
長四年和賀れ嫡流秀親病死して
子なりこゆ人忠督と忠親ふつりて曰
年秀親死す

秀親

伊豫守

生國お母

長四年

東照大権現とあり

同四年

大権現奥列ふおしきなすひ上松系勝と

正治せんときさしり時存治助少備

之成と明しあしじかん乃きさえありけ

まは

大権現沖軍とありけの時秀親 何と

うけらるりしとて共と同く家勝

かよき人となりか津金修理胤久中河多肥
忠重を命とつてふ重俊又 均命あり
ておのく我國よりありて城とまら
づまのり甲清六れとらけらあり
て御朱印と下り給ひて我親本堂
の味よりあり
同年か相出小野寺を記す義道が領
内少く一揆蜂起す我親六御共庫以
政考とけりりこととありて仙北境にて

金我とれ事二日ありて一揆はあり味系
す同六年正月二日江戸より東勅れ時陳列
伊見よおもむく(さ)のしよ中多依波守
正信 命とけりりふりり同年三月

こみしとれ
同年六月依竹太系更義宣が領地と
ありてあたふ時我親も本堂は領
と何とありて常陸国新治郡乃内みく
赤地八子五石とたまりり

同九年本多正信が従ふ属して御城の
御書信なりつやむ

同十年冬常列並同北城書とつとむ

同十一年大坂御陣より信守

元和元年大坂五ヶ所内二条御城の
御書とつとむ

同二年陣列依見御城より書

同三年 御入海の信守

同四年八月より十一月の御書

御城書とはとめ北條が御書氏重より

とつとむ

同九年奥列岩城の御書とつとめ同左

左馬助政長よりとつとむ

寛永七年大坂御城より書

同九年四月より八月まで江戸清水に

御門書とはとむ

同九年九月より十月まで江戸飛石橋

の御門書とはとむ

同子十一月朔日 約命いんめいより甲列こうりつ

那内谷村の城番とつとむ

翌年二月 作つとむより那内谷村と

新元但馬守の奉約よりす年礼万石部

これよりけり

同十一年五月甲府に城番とつとむ九月

沖奉書とたまりりく伊丹松人勝忠に

とす

同十二年八月 約命とつとむ方松平

及他守定房よりして大坂の沖城番と

つとむ同十三年八月これとち屋氏津浦

利直よりとす

同十四年三月 作つとむより日光に沖番

清とつとむ九月よりして其功と成と

同十六年八月より翌年五月より甲府

の城番とつとむ補備尾系茂安津

同為助田盛よりとす

宗親

源七郎

元和七年九月廿一日

右内院殿とあり

同八年九月廿一日

將軍を拜し

家紋八徳

馬場ばば

● 義仲よしのぶ

九馬頭くまづ 兼伊弉守かねいさもり 旭將軍あすか
征夷右軍せいゐ 常刀光生とこみつ 義賢よしか 二男ふたこ

義隆よしたか

清水の冠者しみずのかんげ

母の栢繪はかり

義基 よき

旭三郎 あす

義宗 よむね

旭三郎

鞠子 まゝこ

徳沖 とく

義茂 よし

刑部少輔

経義 けいぎ

王法師 おう

基孝 よきかた

源三郎

家仲 けあち

沼田右馬助 ぬまた

家教くわく

共庫きく

續つづ

法名性安ほうみやうじやうあん

家村くわむら

又また

續つづ

法名禪ほうみやうぜん

家道くわだう

七しち

伊い

法名志ほうみやうし

家督くわとく

家類くわるい

七しち

伊い

法名志ほうみやうし

家親くわしん

孫まご

法名淨ほうみやうじやう

親おや

右系うゑい

法名唯ほうみやうゐ

信通のぶとむ

式部少輔しきぶのすけ

法名安藤あやふで

長方ながかた

源右衛門げんゑもん

法名春史はるし

家方いへかた

大東史おほひがし

法名心孫こころひら

家信いへのぶ

伊豆守いずのみ

正松の元祖しょうのげんそ

家老いへやう

兵部少輔へいぶのすけ

法名桂山けいざん

家範いへはん

左京亮さきやうのりやう

三箇の元祖さんかんのげんそ

長後寺ながごけのてら

家益 いえき

野谷里太馬 のやにわたば

義元 ぎげん

九条太史 くじょうのだし

法名照山 ほふなしょうざん

義勝 ぎしょう

彈正少弼 だんしょうすけ

法名莫山 ほふなばくざん

玉林 ぎんりん

定勝寺 じょうしょうじ

義康 ぎこう

源右衛門 げんえもん

法名陽山 ほふなやうざん

義昌 ぎしょう

伊弉守 いせのり

法名玉山 ほふなぎよざん

東保寺 とうほくじ

義豊 ぎほう

上杉三郎 かみすぎのさぶら

義人 ぎんと

義利

仙三郎

母武田信玄むけだのぶげんの

法名りやうな家名

義志

長次郎

母義利むぎりの

義親

右衛門

母乃元祖むのむねそ

家昌

安食野次郎

共幼丞ともわらわ

上野うのの元祖

家系

三郎さんらう常陸ひろはる介

馬場まばの元祖

里門さとかどと伝つた知ちす

家清

三郎さんらう刑部けいぶ左衛門ざえもん

熱川あつがわの元祖

家重

右衛門

家統 いえむね

越後守 えちごのり

林号す はやしごうす

本名よりのはめ馬場と ほんなよりのはめばば

家仁 いえに

三郎 ざぶらう

びるまこー申納 びるまこーまうり

某 なにがし

相持守 あいまもり

某 なにがし

文内少輔 ぶんないしょうぶ

法名天祐 ほふなまてんすけ

昌次 まさつぐ

才左衛門尉 さいざえもんゑい

才左衛門尉系勝陣北討小山よあわく さいざえもんゑいけいしやうぢんきたうこやまよあわく

東照大権現山村の場子村三人ありおきね

とよとせしうれ別留次やまひあつぬし

昌次子利重沖目見しう小山うく石田

治次が猫三成孫頼のきこうめされ

小山より江戸へ遷沖ありそ何れ本居

の若石川備前代友なりし人石田三成

町となりびとびと村山村昌次まうらう

沖忠長とすなと 作らうらう

本居れうらういせも町との 沖忠長

を以載一校地一教句とたり一入

あひのりてとらく沖勇の候うけ

たよとせぬ(お)もよ 昌次

何いのり本居これ由用もうけたま

まぬ

修外本居中法侍如先親致良垂

と系若と自取おか下致忠良い

杉山村甚多清馬場と及焼子村年馬

千村脚長(清)と下りい

文長五年

八月朔日御朱下

本番

法をまへ申

中多依渡書

奉之

大保十書

大権現小山(とやま)を江戸(きん)へ還御(かえりま)の時昌次(しやうじ)と本

番(ばん)へ送り置れり此(こ)の別(わか)いろく御(ご)の具(ぐ)

ごも御(ご)の具(ぐ)より一(ひと)つとて皮(かわ)地(ぢ)におも

じく

右(みぎ)院(いん)殿(だん)中山(なかやま)石(いし)より御(ご)の路(ぢ)の刻(とき)本(ほん)番(ばん)

のものがともしきまると御(ご)目(め)見(み)たり

まわりいろく御(ご)の具(ぐ)

開(ひら)系(けい)御(ご)の具(ぐ)陣(ぢん)れ候(こう)

大(おほ)権(けん)現(げん)大(おほ)坂(さか)へ御(ご)の具(ぐ)つりつりの時(とき)本(ほん)番(ばん)れ候(こう)

ともしきまると御(ご)の具(ぐ)より御(ご)の具(ぐ)御(ご)の具(ぐ)

好(よ)おが御(ご)の具(ぐ)れ英(えい)法(ぽう)の御(ご)の具(ぐ)一(ひと)番(ばん)

よ御(ご)の具(ぐ)を御(ご)の具(ぐ)

利重

三(さん)江(え)屋(や)浦(うら)の村(むら)

宣隆 ふた

彦三郎 ひこ

利貞 と

権六郎 ごん

幕の紋本三ツ川 まゝ 子ありと こ 昌次 まさ
時より釘費よありたむ

政業

野山

寺傳小いしつゝ海津の唐麩
やま山坐ふ所ふは
より石とくく標号とす

新巻

冬列半田の味来寺八橋釣場の
生園冬列 妙山

四ヶ所と修す

天文十七年五月廿六日織田信長共々

つらりて丸川大宮の城と

ひ今川義元改兼とにのりて是とせむ

ふ時政兼と河原と其期と約して

後浩に〜しむ〜しむ〜改兼の城と

川〜は〜是とせむと約ふより義元書

状と送る事河原と約とにふ事を

い〜〜丸川の共よ〜〜して又家

や〜時政通る〜ひみ一族あり〜

討死時政通五十六歳 法名三助道白

元政

教養

生國同前

東照大権現今川義元が所小おしきた

ま〜時元政志〜ひを〜時権田

源元信〜は〜は信守す元信が長

み七郎長清元重子なり〜

大権現三列へ沙柵りの時え改 伯り
しりて柵田氏とつくま後

大権現え改め 伯けふは比柵田氏と

柵田のりよの移れありさるも柵

山と柵田のりよの改めさるの氏のだ

えん事と行いさるさる此あは

たとい汝柵田の改めさるさるも

野山と柵号とすべしえ改 伯命

小志さるさるさる山と号す三列東

條乃月ありく畠山村とたまりさる柵
田氏の系比山中安祥小針を瀬比同
とのりせ領と

大権現寺の城とせめたりさる時え改先

陣ありすんで左の股二ヶ所とさる

え能えの傍川合我の時着級とせ

たりけおありの合我め敷なれ軍切

あふあり三列と本村と加増の地たま

しり

同三年十二月廿二日三方系合戦此時
首級と坊と付死と修去うの首と
送く比類なりと付死のより修去
町三十九条 法名明岩吾称

頼兼

新嘉 生回同お

知少乃付しり

大権現よけく人なりを境 仁みしりく

台徳院殿よけく人なりを境入流れ修去
同三年武列の流那やく芽修
村とたましりか

同七年上列勢よ助ふく川加増わ
依く川勝お奉り也なれ

て武士村とたましりか

同九年七月廿二日死す 三十三歳
法名長芳淨受

魚網

新書坊 生田正徳

享長十年九月十七日

台座院殿とあり

同十四年 信之修く河鵬也

河鵬

同十八年

台座院殿村藝と河鵬此河鵬河前

あくの的と村く河鵬とあり

同十七年 河鵬と河鵬此河鵬

同十九年 大坂陣の時信也

元如元年 大坂陣元月七日合戦

兼信信武者と河鵬とあり

仲の武者信の立烏帽子と洗米乃

信とあり

同三年 寛永三年 河入信の時

信也

同年清陵中清着れ沖着重と改め
たぬの内通徳清着とつやむ事
すくぬ入年と名れ勅号と感取し徳と
く黄令とたぬふ
寛永四年兼徳が沖奉ふとつとむ
事と感とたぬひく沖服と徳
同八年 徳と徳と徳とたぬふ
同年七月五日清初ちく何休と
はく入ちぬふ

同年九月はく入とつとむすし徳
ありて黄令とぬ領す

同年十一月
台煙院殿清不例の時兼徳勅号と

將軍と清感候ありく黄令とぬ領す
清服とぬ領す

同年十二月御加増の地とぬ領す
同九年

名徳院殿薨御此後
將軍より銀五百枚とたまはけり

同六年六月 御みよりの清書とあり

同十年二月 法圓より御書とあり

御書より所書とあり
御書より御書とあり
御書より御書とあり

同十一年 御入法此後

同九年 御光法此後

同十二年 御命より御書とあり

同十年十月 御書より御書とあり
正徳寺に御書とあり
御書の御と巡検して聖山田院此
所海に事とあり

同十六年 御書より御書とあり

同十七年 御書より御書とあり

同十八年 御書より御書とあり

同十九年 御書より御書とあり

同二十年 御書より御書とあり

海上ありくも亦なりびし實買の物と
焼盡し一舟より數人の死たはけて
同は海よりあけりしとて同は若志
すこれよりしりき 物命あつて任せ
ふいば神法を利支丹の神法といふ
くく同民とすもあつてはるる
くく海海といふもあたふり今後
も海海はあつてはるる
あたふりしりき今又海海と

かゆりくれしり

同十一年四月日光清系治の信を

兼周

一高たきり 生國武飛

寛永四年三月廿八日

將軍あしとあし

同九年食録とたまはる

同十年武列賢美勢あしとあし

わりの石神村イソトウとたまりか
日十一年河入洛の侍

道宗 Michimune

源光盛 生国同前

寛永十六年七月廿三日

將軍家より

元綱 Genetsuna

兵部 生国同前

秀元 Hidekazu

河原清門 生国同前

兼久 Kenhisao

左近 生国同前

天保九月十文字

